



水やり3年

校長 清水 誠

知り合いに鉢花をあげた時に、必ずといってよいほど「水やりは1週間に何回やるのですか?」という言葉が返ってきます。植物によっても、季節によっても水やりの仕方は違うので、一概に「週に何回」などと言うことはできません。「どうやらこの人は苦勞するだろうな」といつも思う瞬間です。たいがいの植物の水やりの基本は、「鉢の中が乾いたらたっぷり水をやり、鉢皿に水をためないこと」となっています。それでも多くの人達は、水やりの仕方がうまくいかずに鉢花を枯らしてしまうことになるのです。「水やり3年」という言葉があるほど、園芸の道では基本中の基本であるはずの水やりも、完璧にマスターするのは至難の業です。失敗の多くは、水のやりすぎがほとんどではないでしょうか。かく言う私も、今まで水のやりすぎで、散々多くの鉢花を根腐れさせてしまいました。

目の前に植物があると、人はなんとなく水をあげたくなるものです。成長のために、今こそ思っていることなのでしょう。しかしそれは、近くにいる子どもについて手をかけてしまうのと似ています。焼き魚を食べている時に、箸がうまく使えずに苦勞している子どもの姿を見て、小骨を全てきれいに取り除いてあげたとしたら…。あるいは、忘れ物があつたら大変と、ランドセルの中身を全部大人がそろえてあげたとしたら…。子どもの発達段階にもよりますが、ついつい子どもにさせずに大人が先に手を出してしまうのは、愛情という名の「水のやりすぎ」であり、子どもが根腐れを起こす原因となるのです。

学校では、図工の時間に低学年でよくハサミを使います。また、3年生以上の学年では、図工室で金づちやのこぎり、彫刻刀を使った授業が見られます。さらに家庭科室では、包丁やガスコンロを使った調理実習があります。道具の使い方については、授業の始めにしっかり指導をしていますが、それでも保護者の方々が参観されたら、手を出したくなるはずです。先日、全校で行った「子どもまつり」でもそうでした。交流学級で考えを出し合い、前日に材料を持ち寄ってお店を用意しました。段ボールや新聞紙を貼り合わせて、子ども達は一生懸命工夫して準備に汗を流しました。教員が全てお膳立てをしまえば、子ども達ももっと効率よく楽しめるお店になっていたかもしれません。どこまで子ども達に任せるか、という加減が大切なのです。

園芸のプロは、鉢の中が乾いたかどうかを土の中に指を入れて確認するそうです。そして、鉢底からザアザアと流れ出るまでたっぷり水をやりをします。私達も、子どもの^き渴^い具合をしっかりと見定めることができるようになりたいものです。